

## パイオニア精神

第4期（1956年卒業）新井龍二

教養学科を志したのは、経済学などの専門科目を学ぶに当たっては、幅広い教養の裏付けが重要で、特定の国を、歴史、政治、経済、社会、文化などの分野で総合的に研究することが、広い教養を身に着ける手掛かりになろうと考えたからだ。

各学年の定員を70名に抑え、国際関係論を除けば、各科は多くても10名程度に抑えること、また設立の歴史が浅く、まだパイオニア的精神が全体にみなぎっていたことが、極めて魅力的だった。私は今迄旧世界の文化に慣れ親しんできたので、ここで、20世紀に入って瞬く間に巨星に成長したアメリカを、徹底的に勉強したいと考えて、中屋健一先生が担当されるアメリカ科を選んだ。

中屋先生のアメリカ史は、アメリカ流 synopsis を使ったの徹底的なスパルタ教育で、1週2回の膨大な assignment をこなすには格別の努力が必要で、毎回夜遅くまで準備に忙殺された。大学の授業で、今迄これほど真剣になって取り組んだことはなかったので、目が覚める思いだったが、今は先生のしごきに深く感謝している。先生は教室を離れると、慈父のような人柄にもどられて皆から慕われていた。斎藤光先生のアメリカ文学、斎藤真先生のアメリカ政治、一橋大から来られた小原敬士先生のアメリカ経済、どれをとっても素晴らしい講義で、それぞれのクラスにのめり込んでしまったために、アメリカ科の授業についていっただけでも手がいっぱい毎日だった。然しながら、なにせ20代の疲れを知らない、最も活力に満ち溢れた世代でもあり、教養学科生だけが享受できる多文化取得の折角のチャンスを、見逃すわけにはいかず、積極的に面白そうな講座を探し回った。

当時の教養学科では、個性的な、極めて優秀な先生方による、魅力的な講座が幾つも開かれていた。教師対生徒が1対1のケースもあるなど、少人数のクラスが普通で、学生は自分の所属する科には関係なく、自由に出席出来た。このため欲張って（自分の capacity 以上であることを承知しながら）できるだけ多くのクラスにあたってみた。中でも竹山道雄先生のFaust (LeipzigのAuerbach酒場でのMephistophelesおよびFaustの学生相手の芝居めいた情景が目の前に浮かび上がってくるような名講義)、SPレコードを聴きながらのWien大学教

授の Wuess 夫人によるドイツロマン派音楽講義、島田勤治先生の情熱そのものの比較文学論、風呂敷包みから本を取り出して英語で俳句を講じられた Blyth 先生などの面影が、今でも懐かしく浮かんでくる。

アメリカ科の同期生 11 名(現在 8 名)はそれぞれユニークな個性の持ち主で、文科、理科出身の混成部隊だが、それだけに仲がよく、現在でも数人が教養学科同期会の有力なメンバーとして、年に 3~4 回会食して、旧交を温めている。

いま振り返ってみると、私が教養学科から得た最大のものは、pioneer spirit であり challenge 精神だった。

卒業後、アメリカ科第 1 期の鈴木正美先輩以降 2 年間新卒採用を停止していた東京銀行に就職できたのは実に幸運だった。東銀は貿易金融を主業務とした戦前の横浜正金銀行の後継者で、その良き伝統を引き継いで、他の都市銀行をはるかに上回る自由な職場の雰囲気を持つ銀行として、よく知られていたからだ。実際、行内での地位のいかんにかかわらず、頭取に対してすら、<さん>づけで接しているし、男女の別を問わず、因習にとらわれない自由な発想が尊重され、下からの業務改善などの提案も積極的に取り上げられて、実行に移される事が多かった。

私は入行 5 年後にハワイ大学に設立された East West Center (EWC) の最初の奨学生として、2 年間にわたりアジア諸国、並びにアメリカから選抜された postgraduate の学生との交流を深めることに努力した。その間、東銀は休職扱いではなく、制度上、米国派遣として鷹揚な扱いをしてくれた。EWC ではそのプログラムの一環として、アメリカ本土に留学することが許されていたので、私は、Philadelphia の Pennsylvania 大学 Warton Graduate School を選んだ。Drucker 教授など一流の教授陣の授業を受けて、中屋教室並みの猛勉強を強いられたこと、夏休みに当時は日本の学生には殆ど無縁であったヨーロッパ大陸をまわって、各国文化の相違を自分の肌で感じ取ったことなど、国際的なものの見方を、格段に広げることができたのが極めて大きな収穫だった。

その数年後、国際金融の舞台では、Euro Dollar ビジネスが急速に拡大していた時期に、私は勤務先の香港から帰国して、東銀本部の国際投資部に配属になり、新規海外業務の推進に携わってきた。1976 年 London に設立された多国籍銀行の Saudi International Bank (Saudi Monetary Agency—通称 SAMA—を大株主に、Morgan 銀行など米英独仏スイスの欧米主要銀行 5 行および東銀が経営を分担)に出向を命じられ、各参加行型の出向者と共に新銀行の基礎固めを行い、

その後主にアジア全般を担当して、アジア主要国を回り、各国のサウジアラビアへの進出優良企業などへの業推をおこなった。少人数の経営陣の中で唯一の日本人として、東銀での豊富な銀行業務全般の知識と経験を生かして、東銀の強い支援のもとに経営陣の全幅の信頼、支持を受けて、慎重ながらも、思い切った推進策で業績を積上げることができた。各行からの出向者は、国籍のいかんを問わず、優れた人材で、学識に富み、いずれも礼儀正しく、新銀行を成功に導くとの共通の目的に向かって団結しながら、和気あいあいの雰囲気醸し出してきた、出向者の殆どが5年余りで、古巣にもどったが、私は開業以来謳歌してきた自由闊達の雰囲気が気に入ったうえ、国籍の異なる優秀な出向者達との交流が楽しく、かつ思う存分に腕の揮える職場であることから、東銀に特例として出向延長を認めてもらい、1982年には東京駐在員事務所を設立して所長になった。東銀を退職して、Saudi International Bank に移籍したのは、出向以来二十数年後だった。

教養学科、東京銀行、East West Center および Saudi International Bank での生活はどれも極めて満ち足りて充実したものだった。その共通点は pioneer spirit と challenge 精神に他ならない。